

2020年 新年の干支 「庚子 (かのえね・こうし)」に思う
更新され、陽気が動き始める年(次の波を作り始める年)!!
新たな需要創造と既存住宅の新ビジネスに取り組む年!!

あすなる会顧問
株式会社 山西 代表取締役社長 西 垣 洋 一

新年を迎え、謹んで新春のお慶びを申し上げます。
旧年中はあすなる会の皆様には、格別のご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

2019年を振り返りますと、5月1日に新天皇が即位され、「明日への希望と共に、日本人1人ひとりが大きな花を咲かせる」との願いを込め、新年号「令和」の時代が始まりました。私たちの生活に影響のある出来事としては、10月に10%への消費増税が実施され、又、大型台風・記録的豪雨に見舞われ、甚大な被害を引き起こされました。リスクに対する備えの必要性とともに、BCP(事業継続計画)や災害やテロなど想定外の事態で社会システムや事業の一部の機能が停止しても、「全体としての機能を速やかに回復できるしなやかな強靭さ」を持つ災害レジリエンス(復元力・回復力)の高い社会の実現が叫ばれました。

2020年の干支は「庚子(かのえね・こうし)」になります(右、干支の智慧 参照)。この干支「庚子」を人間や組織に当てはめると「庚」は、完成した個人・組織から不要な価値観をそぎ落とし、新しい環境へ対応する体制を整える年となり、「子」は、個人は自分の軸となる価値観をしっかりと持つ、組織は新たな局面に対応できる人材の育成・活用に取り組む年となります。「庚子」は、本年を過去の成果から引き継ぐべきものを維持しつつ、新たな環境や局面に向けて体制を整えていく年であると示唆しています。

〔2020年以降の大変革期を迎えた木材 住宅業界の主要課題〕

- ① 非住宅分野の木造化・木質化による新たな需要創造。
- ② 新ビジネスとして中古住宅流通とリフォームを鍵とする住宅ストック循環システムの確立。
- ③ 省エネ ZEHは当たり前のモデルプランづくりなどによる住宅・建築物の省エネ化の推進。
- ④ 次世代住宅ポイントなど政府による住宅建設の促進施策の活用。

足下の住宅市況は、潮目が変わったかと思える程、先行きの不透明感が増している状況です。

〔社内内部体制の強化に向けての主要課題〕

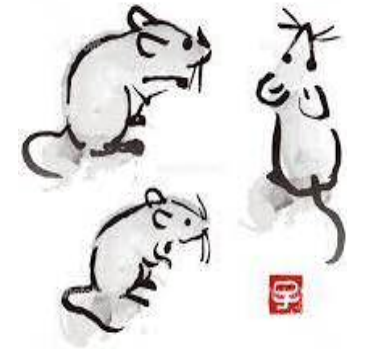
- ① 「働き方改革」への対応 - 昨年4月1日から「働き方改革関連法案」が順次施工され、本年の4月1日からは猶予されていた中小企業にも順次摘要されます。更なる生産性の向上と効率化を図り、経営の安定と持続的成長の為の具体化はもはや待ったなしといえます。
- ② ドライバー不足などによる物流コスト高への対応 - 住宅資材は、重い・長い・かさばるという荷物アイテムの特性の為、他業界に比してドライバーの負担が大きくドライバーの確保は難しい面があります。2017年11月に改正された「標準貨物自動車運転約款」を順守した業界の物流構築の理解が不可欠となります。

当社はこれからも、「新たな需要創造」と「新ビジネスの確立」に向け、お役立ちを図り、皆様のファースト・コール・カンパニーとして、皆様とともに歩んで参る所存です。本年も変わらぬ御愛顧の程宜しくお願い致します。最後になりますが、皆様のご健康と事業発展を心から祈念申し上げ新年の御挨拶とさせていただきます。

2020年1月吉日

◆干支の智慧

「本年の干支は、「庚子(かのえね・こうし)」になります。「庚」は陽の金で、「子」は陰の水となり、相生という状態になります。相生とは相互助長、相互産生であり、お互いに助け合って成長していくことを示しています。また、植物に例えると、「庚」は成長を終えた草木が次の世代を残すために花や種子を準備する状態を表し、「子」は固い種に押し込められていた生命が、新たに芽生えて、様々な方向に育ち始める状態を指します。つまり、「庚子」の年とは過去の成果から引き継ぐべきものを維持しつつ、新たな環境や局面に向けて体制を整えていく、新しい時代へと変化を遂げていく年と言えます。大変革期を迎える2020年、東京オリンピック・パラリンピックの開催など鼠が動き回るように慌ただしい年になりそうですが、子年は十二支のなかでも最初なだけに、心機一転気持ちも新たに物事に対応したいものです。」



◆干支の格言 (「鼠」にちなんだ諺・経営語録)

- 「鼠が塩を引く」『俚言集覽』
鼠が塩を持っていくのは少量ずつで、一見すると被害はないが、度重なると多量になるということから、小事が積み積もって大事になるということのたとえ。
- 「鼠も虎の如し」『今昔物語集』
小さくて弱い鼠でも必死になって飛び出すときは、虎のような勢いがあることを指す。転じて勢いに乗って攻め込むときは、弱い者でも相手を圧倒するような激しさがあるので、油断してはいけないという戒め。
- 「鼠を以って璞(はく)と為す」『尹文子』
古代中国の鄭の国では宝石の原石を璞と言ひ、周の国では鼠の肉を朴(はく)と言う。周の人が鄭の商人に「はく」を買わないかと言われ買ったが、実は璞ではなくて朴だったという故事から、取るに足らない物を高価な物として扱うことを指している。
- 「鴟目(しむく)大なれど視ること鼠に若かず」『淮南子』
フクロウの目は大きいですが、視力は鼠にも及ばないこと。大も小に及ばぬことがあり、多も小に劣ることがあるというたとえ。
- 「偃鼠河を飲むとも、腹を満たすに過ぎず」『莊子』
鼠が川の水を飲んだとしても、腹いっぱいにする以上は飲めないもので、僅かな量に過ぎないこと。人にはそれぞれに定まった分があるということのたとえ。
- 「月の鼠」『宝物集』
月日が過ぎ行くこと。また、人生のはかなきたとえ。
- 「驥(き)をして鼠を捕らしむ」『莊子』
名馬に鼠を捕らせても、全く役に立たないこと。人の使い場所を誤れば、有能な人も無能な者と区別がないことのたとえ。